ジュニア・パスポート

Does the Future Sleep Here? Revisiting the museum's response to contemporary art after 65 years

ここは未来の眠る部屋とアーティストたちがなりえてきたか？

――国立西洋美術館65年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ

国立西洋美術館は、14世紀ごろから20世紀半ばまでの、古い時代の西洋美術を中心に展示をしている美術館です。
ふだんはあまり、「現代美術」は展示しません。しかし、美術館の創設にかかわった人たちは、この美術館が、
未来のアーティストに刺激をもたらす場所であってほしいと考えていました。

「展示室は未来の世界が眠る部屋である。」

18世紀ドイツの作家ノヴァーリスの言葉のように、美術館は、未来の世界と出会える場所になっているでしょうか？

その問いをテーマにしたこの展覧会では、21組のアーティストが当館の所蔵作品とじっくり向き合いました。
作品から刺激を受けて新たなアイディアで作品を作ったり、異なる時代・テーマの作品を、ともに展示したりしています。
現代のアーティストたちは古い時代の美術作品から何を感じ、どのような作品を生みだしたでしょうか？
さまざまな作品との出会いをあなたも楽しんでください。

展示室でのマナー

さわらない

作品は大切にしましょう。

走らない

作品や人にぶつかると危険です。

さわがない

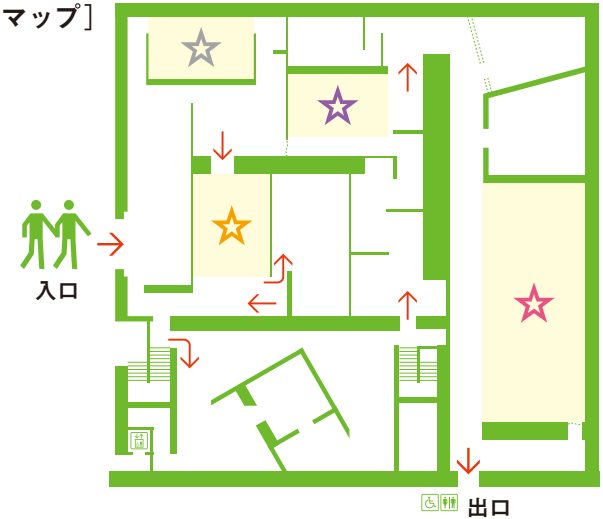
小さめの声でお話しましょう。

エンピツを使おう

作品をインクで汚さないように。

＊本冊子は、小学校高学年〜中学生のみなさんの鑑賞を想定して作成しました。
低学年のみなさんは保護者の方と一緒にご覧ください。

［フロアマップ］



この冊子では、いくつかの作品を紹介します。
☆のついた場所で作品を見つけましょう。

美術館のはじまりとアーティスト

国立西洋美術館の歩みは1959年（昭和34年）、375点の「松方コレクション」*からはじまりました。それらは大正から昭和のはじめ、実業家の松方幸次郎が日本の人々、とりわけ若いアーティストたちに本物の西洋の絵画や彫刻を見せたいと願い、ヨーロッパの国々で買い集めたものでした。美術館の創設には、国や企業だけでなく、当時のアーティストたちも協力しました。

＊松方コレクションとは？

川崎造船所（現・川崎重工業株式会社）を率いた実業家・松方幸次郎が集めた数多くの作品。第二次世界大戦などにより離ればなれになり、失われたものもあります。
戦後、フランス政府の管理下に置かれていた375点が日本へ寄贈返還されました。国立西洋美術館は、「松方コレクション」を保管・展示するために設立されました。

本展参加アーティストのうち、辰野登恵子氏（1950年－2014年）は故人です。

内藤礼（1961年生まれ）
《color beginning》 2022-2023年
アクリル／カンヴァス　作家蔵

――感じるなにか、見えるなにか

ポール・セザンヌが描いたのは、故郷・南フランスの家のそばの風景です。彼は身近な場所であるこのあたりの風景をよく描きました。内藤礼はこの絵と静かに向き合い、新たな絵を描いてセザンヌの絵のとなりに並べました。

白い絵の前に立ってみましょう。あなたには、なにが見えますか？

家族や友だちにも、
どう見えたか聞いてみましょう。
あなたと同じ？ それとも、ちがう？

ポール・セザンヌ（1839年-1906年）
《葉を落としたジャ・ド・ブッファンの木々》
1885-86年
油彩／カンヴァス　国立西洋美術館

もし、もう一つの人生があったら？

藤田嗣治（1886年-1968年）
《自画像》 1926年
複合技法、紙　国立西洋美術館　松方コレクション
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 X0199

――時空をこえて、あの人になってみる

藤田嗣治は、戦前のパリで画家として活躍していました。この《自画像》は、そのころに描かれたものです。第二次世界大戦が始まると、多くの画家は戦地などへ出かけて戦争を記録する絵（戦争画）を描くことになりました。藤田嗣治も帰国し、戦争画を描きました。終戦後、世の中は大きく変化し、画家への批判が高まりました。その後、彼は日本を出てふたたびフランスへと渡り、生涯を過ごすことになりました。

小沢剛（1965年生まれ）
《帰ってきたペインターF―Chapter 7, The Return of Painter F》
2015年　油彩／カンヴァス　森美術館

もし、戦争がなかったら、どんな人生だったでしょう？
それに、フランスの**パリ**ではなく、アジアの国・インドネシアの**バリ**へ渡っていたら？

小沢剛は、波乱の時代を生きた画家・藤田嗣治に心をよせ、空想の中から生まれた画家〈ペインターF〉のもう一つの人生を、絵やビデオ映像にしました。映像のなかでは、小沢剛自身も〈ペインターF〉になっています。

ふたつの作品に、似ているところはありますか？

クロード・モネ（1840-1926）
《睡蓮、柳の反映》　1916年
油彩／カンヴァス　国立西洋美術館　松方幸次郎氏ご遺族より寄贈（旧松方コレクション）

――作品がたどった運命に向き合う

松方幸次郎がクロード・モネから直接買ったこの絵は、長いあいだ行方不明になっていました。しかし、2016年、パリのルーヴル美術館で傷んだ状態で発見されました。戦争の時代、疎開先で保管されていた場所の湿気などの影響によるものと考えられます。作者亡きいま、失われた部分を描きなおすことは誰にもできません。

竹村京（1975年生まれ）
《修復されたC.M.の1916年の睡蓮》
（部分、制作過程） 2023-24年
釜糸、絹オーガンジー、カラープリント　作家蔵

竹村京は、この絵がたどった過酷な運命を思い、
新たな作品を作りました。
失われた部分に透ける布を重ねて、
モネが描いた元の色を探しながら絹糸で縫いました。
ありし日の記録を手がかりに、
絵の姿を思い描いたのです。

＊これは作品の一部分の写真です。
展示室で、全体を見てみましょう。

作品の保存と修復――未来の人たちへ作品をつなぐこと

作品は、湿気、光、汚れなどにより傷んでしまいます。美術館では作品に適した温度や湿度、明るさの中で作品を管理し、できる限り長い間よい状態に保ち、次世代に引き継ぐことをめざしています。
この絵はおよそ4割が失われていますが、なるべく、ありのままの姿を残して修復しました。
なぜなら、この姿こそが、絵がたどった歴史や、作品を守ることの大切さを皆に伝えてくれるからです。
保存と修復は、美術館の重要な仕事です。

クロード・モネ《睡蓮、柳の反映》の保存修復作業の様子

あなたが気になるのはどの作品ですか？

それはどうして？

ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？
―― 国立西洋美術館65年目の自問｜現代美術家たちへの問いかけ

Does the Future Sleep Here?
Revisiting the museum's response to contemporary art after 65 years

会　　期｜2024年3月12日（火）～5月12日（日）
会　　場｜国立西洋美術館
開館時間｜9時30分～17時30分（金・土曜日は20時まで）＊入館は閉館の30分前まで
休 館 日｜月曜日、5月7日（火）（ただし、3月25日（月）、4月29日（月・祝）、4月30日（火）、5月6日（月・休）は開館）
主　　催｜国立西洋美術館

ジュニア・パスポート　執筆・編集｜白濱恵里子（国立西洋美術館）　デザイン｜栗原幸治（クリ・ラボ）
制作・発行｜国立西洋美術館 ©2024 国立西洋美術館

いまとこれから
―― 美術館とアーティストたちの旅は続く

展覧会はいかがでしたか。個性（こせい）あふれるさまざまな作品と出会えましたか。
いつの時代にも、その時代にふさわしいテーマが生まれ、新しい美術が生まれています。
これからも美術や美術館は、変化し続けていくということを感じてもらえたなら嬉（うれ）しいです。
また、ぜひ国立西洋美術館で会いましょう。

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art

名前

日付

年　　月　　日